

William E. Connolly,
Capitalism and Christianity, American Style

Duke University Press, 2008. pp. xvi + 174, \$ 21.95.

齋藤 公太

近年、公共領域における宗教の影響力が従来よりも認知されるにつれ、宗教学を専門としない論者による宗教研究が少なからず発表されている。政治哲学者ウィリアム・E・コノリーによって著された本書もまた、そのような研究の一つとして数えることができるだろう。コノリーは *Why I am Not a Secularist* (1999年) や *Pluralism* (2005年, 邦訳『プルーラリズム』, 2008年) 等の著作で既に宗教の問題を扱っているが、本書では現代アメリカにおける福音派キリスト教と資本主義との結合という現象を取り上げ、宗教についてより精細に論じている。

本書の構成は以下の通りである。

緒言

序文 資本主義の精神

第一章 資本主義の気まぐれさ

第二章 福音派 - 資本主義共鳴機械

第三章 学問と信仰の間

第四章 エコ - 平等主義的資本主義は可能か?

第五章 キリスト教, 資本主義と悲劇的なもの

以下、各章の内容を簡単に紹介した後、本書の有する意義と問題点を検討したい。

序文で著者は、「スピリチュアリティ」と「エートス」という二つの主要な概念を定義し、その上でキリスト教と資本主義、そしてそれらの結合体を分析するための見取り図を提示する。著者の定義によれば、「スピリチュアリティ (spirituality)」とは「それらが一部を成すところの形式的な信条や信仰からはある程度独立した、個人と集団による判断と行為の性質」である。そして「エートス (ethos)」とは、「共有されたスピリチュアリティ」のことを指す。著者は、いかなる制度的行為であれ、その制度自体に埋め込まれたある種のエートスに影響を受けていると述べる。

以上の定義をふまえて、著者はキリスト教の伝統に内在する二つの「スピリチュアルな志向」を論じていく。その一つは「寛容」のエートスであり、もう一つは「復讐」のエートスである。他者に対する「寛容」のエートスは、スティーヴン・ミッチェル (Stephen Mitchell) の実証的な

聖書研究によって明らかにされた本来のイエスの言葉や、トマス・ジェファソンによる聖書解釈に表れていると著者は言う。他方の「実存的復讐」のエートスは、新約聖書における「ヨハネの黙示録」に表れている。ヨハネの黙示録はアメリカの代表的な宗教右派である福音派キリスト教によって発展させられ、新たな意味を獲得した。福音派は黙示録をアレゴリーとしてではなく現実を起こる未来として捉え、そのような解釈から他者に対する「復讐」と、苦しみの代償を得る政治的・経済的「権利」というエートスを生み出したと著者は言う。このような福音派のエートスは、現代のアメリカでは資本主義と「共鳴」し、「福音派 - 資本主義共鳴機械 (the evangelical-capitalist resonance machine)」が生み出されている。そのような「共鳴機械」に対抗するためには、「寛容」のエートスの連帯による「対抗共鳴機械 (a counter resonance machine)」が必要とされる。

著者によれば、資本主義とは「気まぐれ (volatile)」で「偶然的」なものである。といっても資本主義は封建制や国家社会主義とは明確に異なる性質を有しており、それは「資本主義の公理系 (a capitalist axiomatic)」として表される。資本主義の公理系とは例えば「私的利潤の優先」や「市場による価格調整」等であるが、これらに教育、科学、技術等の諸制度、そしてエートスやスピリチュアリティ等の様々な要素が結合することによって資本主義集合体 (capitalist assemblages) が生み出される。これら集合体を構成する諸要素は、直線的な因果関係によって結ばれているのではなく、相互に浸透し、影響を与え合う関係によって結合しているのである。

第一章では、本書の議論の前提となる資本主義の「気まぐれさ (volatility)」について、過去の思想家の理論を援用することにより分析が行われる。まず著者は、マックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』における分析に改めて着目する。ヴェーバーはカルヴィニズムのエートスが資本主義を稼働させたことを明らかにしたが、この議論では資本主義が偶然的要素の複合により生じると見なされており、その点で著者は、資本主義の「気まぐれさ」、そしてエートスの重要性を示したものとして再評価する。ヴェーバーと同様に資本主義の「気まぐれさ」を分析したものとして、著者は初期マルクスの論文「プロシア王と社会改革についての批判的覚書」を取り上げる。この論文においてマルクスは、社会に貧困が生ずる原因を国家行政と私生活との間の矛盾した関係にあると分析している。このような矛盾した関係を維持しつつ結合させるものの一つが、キリスト教のエートスなのである。

これらの考察において、ヴェーバーとマルクスは共通する視点を有していると著者は見る。すなわちヴェーバーと（初期の）マルクスは「国家 - 資本 - キリスト教の複合体」を認識していたという。この複合体において、各要素がどのように共鳴し、結合するかは正確に予測することができず、それゆえ「気まぐれ」である。

「国家 - 資本 - キリスト教の複合体」に関する分析をさらに進めるため、著者はドゥルーズとガタリの理論を援用する。ドゥルーズとガタリの『千のプラトー』によれば、国家はある時「一挙に」出現し、同時にそのもとで国家 - 資本の「公理系」も生じたとされる。国家と資本主義の公理系が「一挙に」出現するとは、多様な要素が反響し、均衡状態が崩される中から新たな集合体が現れることを指している。この点で、ヴェーバーの分析とドゥルーズとガタリの理論は一致すると著者は考える。だがドゥルーズとガタリは、資本主義の中核となる要素をカルヴィニズムに限定せず、資本主義の気まぐれな性格をより詳細に描き出しており、その点で現代的な意義を

有している。しかし著者は、ドゥルーズとガタリが資本主義と結びついた福音派の台頭を予測し得なかったとし、改めてヴェーバーとマルクスの理論の重要性を指摘する。

第二章で著者は、福音派キリスト教と資本主義、さらに種々のメディアや共和党勢力との関係性を、「福音派 - 資本主義共鳴機械」という独自の概念を軸に考察する。著者によれば、いかなる政治・経済や宗教的实践もそれだけで「自己充足」することはありえず、それらは相互に独立を保ちつつも、共鳴し、浸透し合う。この事態が「共鳴機械」である。「共鳴機械」を構成する諸要素のうち、いずれかが単一の「原因」となるわけではなく、それゆえ一般的な因果性の論理では「共鳴機械」を理解できない。

「共鳴機械」は、宗教的あるいは世俗的な信条の差異を超えて構成されている。著者は、そのような信条間の結合は、「スピリチュアリティの親和性 (affinities)」によって可能になると述べる。ただし、著者はスピリチュアリティが共鳴機械の「原因」だと述べているわけではない。スピリチュアリティは、他の諸要素と相互浸透する共鳴機械の一要素にすぎないからである。

共鳴機械において中核をなす福音派キリスト教（とりわけその右派）のエートスは、キリストの「再臨」のヴィジョンに基づいて組織されている。このヴィジョンはアメリカで六千万部以上の売り上げを記録した *Left Behind* において表現されている。*Left Behind* は黙示録の予言の成就を描写した小説であり、アンチ・キリストに率いられた国連と、キリスト教に「回心」したアメリカ人との戦争が主たる物語となっている。この小説で描かれたヴィジョンは、多くの人間の文化的エートスとなって現実の行為や判断に影響を及ぼすと著者は懸念する。特に、このエートスが国連や無信仰の人間に対する「復讐」の感情を煽っている点を危険視する。このような感性は、神の創造の業と自由市場の創造性を同一視する考えと相俟って、福祉政策やエコロジーに対する敵意につながるという。

無論、共鳴機械を構成する全ての人間が福音派というわけではない。それにも関わらず、企業エリートと福音派は、自らの信条に反する他者に対しての「復讐」、そして環境問題等の集会的未来への責任を放棄し、政治的・経済的な利益を享受する「権利」を主張するというエートスにおいて「共鳴」する。この点において、発展した資本主義からはエートスが抜け落ちるというヴェーバーの理論には限界があると著者は言う。むしろ、生の有限性や苦しみから生ずるルサンチマンが、文化的複合体に行き渡っているとするニーチェの考察の方が、より現代の実状に近いとされる。

福音派 - 資本主義共鳴機械の「復讐」のエートスはニーチェの言う「ルサンチマン」に該当するが、そもそもあらゆる信条や教理はルサンチマンに墮する可能性を有している。問題は、いかに「怒り」を「ルサンチマン」に転化させないかであると著者は言う。そのために重要となるのは、個々の信条では解決できない問題に対処するため、信条の違いを超えた肯定的な共鳴機械、「対抗共鳴機械」を作り出すことである。その際には、福音派の内部で「復讐」のエートスに抵抗している人々と連帯することが重要な課題となる。著者はそのような連帯の可能性として、福音派のジョン・サンダーズ (John Sanders) らによって提唱された「開かれた有神論 (open theism)」を挙げている。

著者によれば、福音派 - 資本主義共鳴機械は、現代に生きる人々が抱く不安と怒りの「症候」である。それゆえ、共鳴機械に対処するためには、それを単なる政治問題として扱うのではなく、

その背景にある「生のスピリチュアルな側面」を理解し、その上で「世界に対する信頼」を新たに構築する必要があるのである。

第三章で著者は、新たに「実存的信仰」という概念を導入し、その概念により現代の学問が直面している方法論的問題を解明しようと試みる。「実存的信仰」とは「情緒的性質、慣習、方法、忠誠、制度的命令において層をなす世界観」である。実存的信仰はあらゆる領域に浸透しており、学問の方法論もまた、その論者の実存的信仰を反映している。

学問の「方法論」と「信仰」の関係性を考察するために、著者はアウグスティヌスの著書『キリスト教の教理について』を参照する。この著作でアウグスティヌスは、異端的な聖書の解釈を排除するために、厳密な聖書解釈の方法を提示している。とりわけ著者は、その中の「神秘の規則 (a rule of mystery)」に着目する。「神秘の規則」とは、厳密な方法論によっても聖書の文言を理解できない場合に、それを「知り得ないもの」として保持するという規則である。著者は、アウグスティヌスのみならず、あらゆる信仰や教理が、それ自体と不可分な「逆説、神秘、謎」を有していると考える。

著者はこの「神秘の規則」を、現代の社会科学において一般的な方法論である「合理的選択理論」と「経験主義」に対比させる。これらの方法論においては、神秘の規則とは「反対の規則」が、同様の戦略的な点において実践されている。それはすなわち、「少なくとも原則的には、世界は完全に説明されるはずである」という「信仰」であり、著者はそれを「統制的理想 (regulative ideal)」と呼ぶ。しかし、実際には統制的理想は「創発的因果関係 (emergent causality)」(異種の要素間の予測不可能な相互作用) 等の説明不可能なものを排除しており、方法論的な前提とはなりえない。それゆえ著者は、学問の方法論における多元性を提起する。そのような多元性においては、方法論における「神秘」の存在が許容される。

以上の議論をふまえて、著者は、実存的信仰と研究の方法論は「ゆるく相互に結びついている」と主張する。「方法論」と「信仰」、そして「感性」の複合体を著者は「問題構成 (a problematic)」と呼ぶ。結局現在に至るまで、問題構成をめぐる論争に決着をつけるような超越的方法論が発見されていない以上、実存的信仰が方法論に及ぼす影響を認め、それを考察することが必要であると著者は言う。そして著者自らが依拠する実存的信仰としては、世界と人間を無目的な生成の集合と見なす「内在的自然主義 (immanent naturalism)」が提示される。

結局のところ、学問の方法論における多元性は今後も続くと思われ。その場合、学会における問題構成間の競合、すなわち学会における多元主義にいかに対処すべきかという問題が残されている。著者が提案するのは、自らの問題構成と他者の視点との競合可能性を受容し、学問的方法論における「寛容」のエートスを生み出すことである。

第四章で著者は、現代社会の問題解決のためのヴィジョンとして、「エコ - 平等主義的資本主義」を提起する。「エコ - 平等主義的資本主義」とは、「暫定的未来」における資本主義の枠内でのエコロジーと経済的平等主義の達成をイメージしたものである。著者は特に、視覚的イメージの重要性を強調する。というのも、視覚的な強度は思考や行為を活性化させるからである。現に福音派 - 資本主義共鳴機械はメディア等を通じてイメージの力を利用しており、それに対抗するイメージを提示することが要請されているのである。

著者は、「エコ - 平等主義的資本主義」の実現可能性を検討するため、フレッド・ハーシュ (Fred

Hirsch) の *The Social Limits to Growth* (1977年) における消費の分析を取り上げる。特に著者は、ハーシュが提案した「位置的商品 (positional goods)」という概念に着目する。「位置的商品」とは、その必要性が他者との関係に影響される商品のことである。ハーシュは、現代社会における欠乏や貧困は、「位置的商品」から生ずる「消費の逆説」が原因だと分析する。通例、「位置的商品」は高収入の階層が最初に使用し始め、メディアを通じてその階層に同一化した中下流の階層も無理な支出によって購入しようとする。このことは中下流階層にとっての大きな経済的負担となるが、上流階層と同一化した中流階層は、下流階層を援助しようとする福祉政策に反対するという。ここに著者は「消費のインフラストラクチャー」と経済的イデオロギーとの「共鳴」を見る。ヴェーバーと同様にハーシュは、発展した資本主義はエートスから分離して自律的に稼働すると考えていたが、現に「共鳴機械」が存在している以上、その点に関しては修正が必要だと著者は言う。

位置的商品の一般化によって組織された社会では、低収入の人々が必然的に不利益を被るため平等主義の達成が阻害される。また、位置的商品の消費が優先されるために環境問題は無視され、エコロジーの達成も阻害される。それゆえ、エコ - 平等主義的資本主義の達成のためには、位置的商品の問題を解決しなければならない。そこで著者が提案するのは、特定の階層を排除する「排他的商品」から「包括的商品」への転換である。さらに著者は、既に確立された消費のインフラストラクチャーを変革するための福祉国家的な政策案と、階層間の収入格差を縮小するための「ミクロ経済的実験」の試案を提起する。

しかし、このような改革案の実行は、現代のアメリカでは福音派 - 資本主義共鳴機械によって妨害されている。他方で、共鳴機械に対して抵抗する潮流も生まれつつあり、そこに著者は期待を寄せる。エコ - 平等主義的資本主義の実現可能性は極めて低い、不可能ではない。そして現在、その実現のために最も妥当な方法は、信条の差異を超えたスピリチュアリティの連帯による「対抗共鳴機械」の生成なのである。

最後の第五章で著者は、ギリシア悲劇などに見られる「悲劇的ヴィジョン」の重要性を訴える。ソフォクレスの『アンティゴネ』等のギリシア悲劇には、気まぐれで人間には理解不能な諸力によって生成される世界、という世界像が見られる。このような世界像は、唯一神によって設定された世界の摂理や、人間の力による世界の支配といった観念とは異質なものである。悲劇的ヴィジョンによって初期キリスト教の歴史を概観した後、著者は、キリスト教との関わりにおいて哲学を形成した三人の哲学者、ジェームズ、ドゥルーズ、ニーチェの比較を試みる。その結果として明らかになるのは、神の「摂理」への信仰とは異なる悲劇的ヴィジョンの重要性である。ジェームズは「有限な神」への一神教的信仰を保持していた点で悲劇的ヴィジョンの立場ではないが、彼の「改善主義」はそれに近接したものであるとされる。

とりわけニーチェの哲学に表れているように、悲劇的ヴィジョンを有している人間は、世界の不確実性を受け入れつつ、悲劇的出来事と戦うことができる。また、悲劇的ヴィジョンは、多様な諸力の存在を認めるがゆえに、異質な他者を受け入れる文化的多元主義の源ともなりうる。他方で、全ての悲劇的な出来事を神の摂理の勝利に結びつける一神教的な神義論は、摂理による補償が得られない場合には、諦念や「復讐」のエートスに転換する可能性を内包している。

福音派と共鳴する経済理論においては、しばしば自由市場の自己均衡が神の摂理と結び付けら

れる。しかし、現実の偶然性に満ちた世界では、市場の自己均衡が必ずしも十全に働くわけではない。その場合、神の摂理と資本主義に対する信仰は、苦痛のエートスへと転化して、資本＝摂理を阻害するものたちへの「復讐」の感情を生み出す、と著者は言う。しかし、悲劇的ヴィジョンによって摂理的ではない世界像を受け入れれば、物事は別の相貌を見せる。同時に、摂理に従わない世界に対する怒りの感情をも克服できるという。

最後に著者は、悲劇的ヴィジョンによって見えてくる今後のアメリカの悲劇的可能性を描き出す。そのような可能性を回避するために、著者は悲劇的ヴィジョンと改善主義を伴った「肯定的共鳴機械」の創出を要請し、結論とする。

以上が本書の概観である。こうした著者の議論は、どのような意義を有していると言えるだろうか。なにより、これまでポストモダニズムに基づく政治理論を研究してきた著者が、「スピリチュアリティ」の重要性を説き始めたという点は注目に値する。こうした著者の変化は、公共領域における「宗教」の影響力が看過できないものになりつつあるという認識（それ自体検討を要するものとはいえ）が一般的に広まっていることの証左であろう。著者の主張はホセ・カサノヴァの「公共宗教」の議論とも部分的に重なるが、スピリチュアリティによる信条の差異を超えた左派勢力の連帯を訴えている点に、本書の新味がある。また「共鳴機械」という著者独自の概念も、資本主義と宗教の関係性を論ずるための新たな枠組みとして、さらにヴェーバーらの古典的分析を現代的文脈の中で賦活するものとして評価できよう。

しかし、本書では野心的な試みがなされているために、問題も多々見出される。第一に、著者の使用する概念の曖昧さを問題点として挙げられる。著者は「宗教」という言葉の使用を避け、代わりに「スピリチュアリティ」という概念を多用しており、それが全体の議論の要となっている。しかしながら、それが指し示す意味は必ずしも明らかではない。一方で著者は、世俗的・宗教的という区分とは無関係なものとして「スピリチュアリティ」という概念を用いているが、他方で個人の実存に根差すものとして、「宗教的」な意味合いを暗示している箇所もある。このような概念の曖昧さゆえに、「スピリチュアリティの親和性」というような議論も可能になるのである。だが、著者が用いる「スピリチュアリティ」という概念は、あまりに多義的であるために、かえってその概念固有の意義が薄れてしまっているように思われる。「スピリチュアリティ」という概念自体の歴史性を顧慮せず、通文化的、通歴史的に使用している点も問題であろう。

第三章で詳述されているような著者の方法論にも問題点が見られる。著者は、記述と規範、学問と実践を意図的に混同させるという戦略を採用する。この方法論はそれ自体が一つの思想的立場の表明であり、その当否は容易に決定できない。しかし、少なくとも本書の議論に限定した場合、その方法論ゆえの主張の性急さは否めない。たとえば著者は、福音派は神の創造の業と自由市場の創造性を結び付けていると主張するが、その証拠として挙げているのは少数の例だけである。一般的な社会科学の基準から見た場合（それ自体著者の批判の対象ではあるのだが）、著者の主張の多くは過度に主観的で、客観的な論拠を欠いていると言わざるを得ない。

以上のような問題点は見受けられるものの、それらは本書の意義を減ずるものではないだろう。著者は、自らの主張と他者の批判との「競合可能性」を了解した上で、革新的な議論を提起しようとしているからである。本書の様々な論点に対しては慎重な検討が求められるが、本書をあく

までも今後の議論を切り開くための「試論」と捉えるならば、宗教学にとって有益な視点を提供するものであることは相違ないであろう。